

家庭の生ごみで発電 静岡県藤枝市、3社と研究協定

2019/11/21 18:29 | 日本経済新聞 電子版

静岡県藤枝市は21日、家庭から出る生ごみの資源化で3社と連携協定を結んだ。微生物で生ごみを発酵させてガスを取り出し、発電する仕組みを研究する。藤枝市は8年前、一部地域で生ごみを分別回収して肥料にする取り組みを始めた。リサイクルできる量を増やすため、異なる活用方法の確立を目指す。

収集運搬をチューサイマネジメント（藤枝市）が担当。粉碎・泥状化はアーキアエナジー（東京・港）が、発酵して出たガスの利用では月島機械（東京・中央）がそれぞれ技術提供する。市にとってはごみ処理の負担が減り、事業者は売電することで利益を得られる。

藤枝市は2019年4月時点で、週2回、市内の25%にあたる約1万5000世帯を対象に可燃ごみと生ごみを分けて回収し、年800トン肥料として資源化している。



協定を交わした藤枝市の北村正平市長（右から2人目）ら

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.